

趣味の独り言

囲碁が趣味である、というとな多数の方がちょっと感心したような顔をしてくれる。それは琴棋書画(棋は碁のこと)と称される、高尚なことをされているんですねという幾ばくかの賞賛と共に、難しげな、珍奇なものをされているんだなあという好奇の眼差しが混じっているように思われる。特に自分も含まれるいわゆる若い(と思っている)世代からは。

私が碁を始めたのは10歳の時、父親に近所の子供囲碁教室に連れて行かれるようになって打つようになった(ちなみに碁は‘打つ’、将棋は‘指す’である)と記憶している。最初は訳の分からないものをやらされてなんだい、という思いで詰め碁の問題用紙製紙飛行機を作っていた位の坊主であったが、これがどうして仲間とわいわい適当にやっているうちに随分と面白いことに気付いていく。碁には一面パズルの要素があり、ああでもないこうでもない碁盤を眺めながら思考するのはテトリスや倉庫番に近い思考である。また一方、殆ど石も置かれていない盤面に対し双方の天王山を一步でも先に見定めようとするのは絵画、感覚の世界に属するかもしれぬ分野である。欲張って全てを得ようとすれば隙が生じ、守りに拘ると柔軟性がない、流水は先を争わざるが如く、など碁に関わる格言・名言はいかにも戦国武将、権力者や現代の経営者、政治家が好みそうなものが多く、実際に碁を打っていて身に浸みて理解する事が多い。……などということは、実はたった今、人に説明しようと思うから並べ立てただけであり、実際の碁の面白さは言葉で語り尽くせる程ではないのである(すみません)。今やこのゲームは世界中に広がっており、チェスはコンピュータに負けて面白くないから碁を始めた、碁こそ神様の作った最高の知的ゲームと言う人までいる。私も学生時代は夜を徹して碁を打ち、大会で負けては夜通し呑み、碁を通じて海外の友達も随分沢山できた。今でも様々な体験を囲碁になぞらえて決断している事がままある。自己の体験に照らせば、確かに囲碁は最高に人生を豊かにする趣味である。

あまりに自分の愛情(偏執?)をさらけ出すと読者が引かれるかも知れない、ちゃんと社会にも貢献できた話も紹介したい。学生の時分は結構な暇を持っているものだから次は子供に教えることにした。子供と言っても自分のではなく仙台で多数行われている子供囲碁教室である。子供たちは大人に比べて非常に覚えが早く、一を聞いて十を知り、私の背中を駆け上がるような勢いで強くなっていく。しかし純粹であるが故に飽きると折れていくのも早い。そのようなダイヤの原石に対して自分が飛躍のカギを握っているというのは、これはやってみると非常に楽しいものであった。囲碁を教わってから礼儀を通す子になってくれました、などと言われると、何もやってなくても鼻面がかゆい話ではある。結局講師として教えることで、教えることが学ぶよりずっと難しく、さらにより多くの事を自分が教わり、楽しみを提供してもらえることを知ってしまった。面白くてずっとやっていたかったが、ついに学部卒業の時に来て子供たちと分かれることになった。私は初期研修医として仙台を離れる事になっている。最後の対局で教え子のみんなは、私の教えた碁の強さと人間として成長した凛々しさを見せてくれた。家に帰って、一人涙がにじんだ。

そんな子たちも数年経つうちに全国で名を轟かす強者になっていたり、プロを目指して突き進んでいる子もいたりする。そんな子たちの事を時々思い浮かべながら、自分の娘にもぼちぼち碁を教えている。